

「黒人」¹⁾ステレオタイプと対抗戦略

—J・ホバーマン著『ダーウィンのアスリート』²⁾における
歴史学的アプローチの場合—

川 島 浩 平

最近私は、アメリカの友人で社会学者であるアーロン・シクレル³⁾と話をして、次のことを学んだ。優秀な黒人アスリートは、合衆国では、スタンフォードのような名門大学に在籍している。しかし彼らは、ゴールデンゲットーにいるかのような暮らしをしている。というのは、右翼の人間は黒人と語るのを好まないし、左翼の人間はアスリートと語るのを好まないからである⁴⁾。

はじめに

ピエール・ブルデューの上の二節は、広く学術論文で引用され、アメリカのスポーツ研究者に少なからぬ影響を与えてきた。その一人ダグラス・ハートマンは、アメリカ文化におけるスポーツと人種の関係の再考を促す論文の冒頭で、この警えが黒人アスリートの置かれた状況を的確に表現していると主張する。さらには、かく孤立した黒人アスリートは、これまでに成し遂げた見事な実績にもかかわらず、白人社会の人種偏見の減少や、人種関係の改善にほとんど貢献してこなかったと論じ、それどころか、このような実績が「完全に人種化されたイメージ、考え、社会的実践を補強し、再生しているかのようであさえある」と宣言する⁵⁾。

ハートマンは議論を展開するにあたって、アメリカスポーツの人種的な

形態と機能に関する、二つの異なる考え方に対する焦点を当てる。その一つは、第二次世界大戦以来アメリカ社会学の主流を成してきた機能主義の正統な後継者ともいえる立場である。そこでは、スポーツは人種差別を打破する上で、積極的かつ革新的な役割を果たしてきたと想定される⁶⁾。もう一つは、第一の立場を正面から批判するもので、修正主義とでも称しうる立場である。つまり、スポーツは人種的不平等や不公正に対抗する場ではなく、むしろそれらを補強し、再生する場であると想定される。ハートマンの主題は、この両者を踏まえた上で、第三のアプローチを提唱するところにある。しかしその詳細な検討は別の機会に譲るものとし、ここでは第二の立場をとる代表的な事例としてジョン・ホバーマンによる『ダーウィンのアスリート』を挙げている事実に注目したい⁷⁾。

ハートマンの整理が示唆するように、『ダーウィンのアスリート』はアメリカにおけるスポーツ研究の修正主義とでもいべき思潮を代表する研究書である。同書は1997年の出版以来、主な書評で取り上げられ、シンポジウム等大きな学術会議の場で論争の標的にされてきた⁸⁾。本稿が同書に着眼する理由は、アメリカの学界やメディアでかくも脚光を浴びたにもかかわらず、我が国では、いつくかの翻訳書や論文で若干の言及がなされた程度で、十分な学究的検討の対象として取り上げられてこなかったからに他ならない⁹⁾。

『ダーウィンのアスリート』の論点のうち、本稿の主題の前提となるのは次の二点である。第一は、現代アメリカ社会に巣食う病理的現象としてアフリカ系アメリカ人の「スポーツフィギュゼーション（スポーツへの固定化／執着¹⁰⁾—スポーツに執着するあまり、スポーツ以外の活動、特に学究的な研鑽や業績を軽視する風潮）」を指摘する点である。第二は、スポーツフィギュゼーションを後押しする要因の一つとしてアフリカ系アメリカ人のステレオタイプが存在するとし、それをアスリート、ラッパー、犯罪者三者の複合による表象「黒人ペルソナ」として特徴付ける点である。以上を踏まえて本稿は、『ダーウィンのアスリート』が、「黒人ペルソナ」表

象に対する対抗戦略と見なしうる分析を試みている点に注目する。

このような対抗戦略については、既にスチュワート・ホールがカルチュラルスタディーズの立場から3つのパターンを指摘している。第一はステレオタイプの逆転である。従順で脇役として映写されてきた黒人俳優に、白人に抵抗する主人公の役を割り当て、英雄として表象する戦略がこれにあたる。第二は悪いとみなされてきた特徴や性質を良いものとして、つまりネガティブをポジティブとして読み直す戦略である。1960年代に黒人運動家が提唱した「ブラック・イズ・ビューティフル」運動はその一例である。この戦略は、文化的多様性や差異を承認し、祝福しようとする姿勢に裏打ちされている。そして第三は、表象の複雑さやあいまいさの中に入り込んで、内側から対抗する戦略である¹¹⁾。

ホバーマンが提起するアプローチは、これらのいずれとも異なる第4の戦略として読むことが可能である。少々強引に要約するなら、ホールが共通の時空間での対抗的表象の構築、ステレオタイプの読み替え、ステレオタイプの生成過程への介入などを提案するのに対し、ホバーマンは異なる時空間に移動してステレオタイプのルーツを探求することで、実体と表象の結びつきの必然性を否定しようとする。ホバーマンが検証しようとするのは、スポーツフィギュレーションのような現象や黒人ペルソナのような表象が、いつ、いかに発生したのか？ それらはアフリカ系アメリカ人の実在性と必然的に関わっていたのか、あるいはそうではなかったのか？ そうではないとするなら、いかなる他の可能性がありえたのか？ などの点である。これらの問い合わせに対するホバーマンの答えを明らかにしながら、彼の議論の対抗戦略としての有効性を考察したい。

現象や表象の歴史的構築物としての性質を検証しようとするホバーマンの姿勢は、黒人運動能力論争における彼の位置とその意義という、本稿のもう一つの主題と関わっている。既に私は遺伝派対環境派という対立軸を設定することで、本論争の概要を明らかにした¹²⁾。そこで彼を環境派に位置づけられるものと想定したが、この位置づけは『ダーウィンのアシリ

ート』の論点や他の機会での彼の発言に照らしても、不当ではないものと考える¹³⁾。アフリカ系アメリカ人のアスレティシズムの過剰や氾濫と、それに伴う学業不振の歴史性および現代性を論証しようとする彼の関心は、むろん環境派の立場と整合的な関係にあるといえるだろう。それでは、本書は環境派の主張としてどれだけ確かな論拠を提供しているであろうか？本稿はこの点も考察の対象とする。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第一節で、現代アメリカにおけるスポーツフィギュレーションの実態をスポーツへの執着と学業不振の両面から概観する。第二節では、フィギュレーションという実践を支え、促進するとされるアフリカ系アメリカ人の表象「黒人ペルソナ」の特徴を記述し、その構成要素であるアスリート、ラッパー、犯罪者間の複合的関係を明らかにする。第三節では、以上描写した現象と表象が形成される歴史的過程に対する、ホバーマンの分析に焦点を当てる。稿末では、『ダーウィンのアスリート』の対抗戦略としての可能性、および黒人運動能力論争における位置づけと役割についての評価を試み、その上で同書が示唆する今後わが国で求められる研究の方向性に言及する。

1. スポーツフィギュレーション：スポーツへの固定化／執着と学業不振

ホバーマンは『ダーウィンのアスリート』の冒頭で、アスリートとしてのアフリカ系アメリカ人イメージの氾濫を次のように描写する。

現代社会には、黒人アスリートのイメージが溢れている。アリーナのフロアから高く舞い上がり、たくましい両腕でバスケットボールをつかむ、飛翔する黒い肉体。このようなイメージは、メディア時代の現代における運動選手の力強さを表す最も重要な象徴になった¹⁴⁾。

黒い肉体のイメージが氾濫しているのは、アメリカ社会に限ったことではない。日本でも、最も優秀なアスリートのイメージは黒い肌をしているのではなかろうか。そしてそのイメージは十分な実績によって裏付けられてもいる。例えば昨夏、日本人のメダルラッシュで沸いたアテネ五輪においても、一部の種目はアフリカ系の人々の独壇場であった。特にその傾向が顕著であったのが陸上男子短距離走100メートルと200メートルである。100メートルのメダリストは上位から順にジャスティン・ガトリン（米）、フランシス・オビクウェル（ポルトガル）、モーリス・グリーン（米）、200メートルは同様にショーン・クロフォード（米）、バーナード・ウイリams（米）、ジャスティン・ガトリン（米）であった。国籍で見ると6名中5名がアメリカ人だが、遺伝的出自で見るとオビクウェルを含む6名全員がアフリカ系であり、その強さはさらに際立っている。

アテネ五輪から視野を広げ、近年の短距離記録保持者を通観するなら、このような印象が強められることはあっても、弱められることはまずない。男子100メートルで世界記録を打ち立てたアフリカ系以外のスプリンターを見つけるには、1960年までさかのほらなければならず（ドイツ人アルミニン・ハリー、10秒2）、ソウル五輪からシドニー五輪までの4大会で男子100メートル決勝に進出した32名全員がアフリカ系である¹⁵⁾。オリンピックと並んで世界のアスリートに巨大な市場を提供するアメリカ主要プロスポーツでも、アフリカ系の優位は動かない。1996年のデータでは、NBA、NFL、MLB の全選手に占めるアフリカ系の比率は80%，67%，17%で、いずれもアメリカ全人口に占めるアフリカ系の比率約13%を大きく上回る¹⁶⁾。だがその優越は、量的なものにとどまらない。NBAでは得点やりバウンドのランキングで上位をしめる非アフリカ系選手は皆無といってよい。NFLでは走力や跳躍力を最も要求されるポジションであるランニングバックやワイドレシーバーを務める非アフリカ系選手は五指に満たない。MLBでは1960年代以来長らく非アフリカ系の盗塁王が出現しなかった¹⁷⁾。

アスリートとしての体力と技能の卓越を称える様々なタイトルで栄冠に輝いた選手の比率は、選手人口に占めるアフリカ系の割合をはるかに凌駕している。

アスレティシズムにおいてアフリカ系選手が圧倒的に優位に立つ状況を目の当たりにして、一般市民はむろんのこと、本来ならアスレティシズムへの過度の傾倒に最も批判的な立場を取るべきはずの知識人でさえ、惜しみない賞賛と祝福を贈ってきた。アスレティシズムがアフリカ系アメリカ人のアイデンティティの一部となることを、諸手を挙げて歓迎し、その社会や文化に対する悪影響を省みる動きなどほとんど見られないのが現状である。このような状況が、ホバーマンのいうスポーツフィギュレーションの第一の位相である。それを裏付ける証言を挙げてみたい。

社会学者ロバート・ステイブルスは、黒人アスレティシズムを「荒涼とした風景の明るいスポット」と呼ぶ¹⁸⁾。アフリカ系の間でのスポーツ礼賛の加熱に警鐘を鳴らし続けてきた社会学者ハリー・エドワーズでさえ、1990年代に絶賛され、英雄視されたNBA選手に関して次のような発言を残している。「宇宙人に人間の可能性、創造力、忍耐力、そして精神力の典型を紹介しろといわれたら、私ならマイケル・ジョーダンを紹介するだろう¹⁹⁾。」アフリカ系指導者がスポーツを重視する理由は、それが彼ら・彼女らにとっての重大な収入源だからでもある。「運動競技における公正のためのレインボーアライアンス」全国委員長であるチャールズ・F・ファレルは、この点について率直に「黒人コミュニティにとっての運動競技は、日本人にとっての技術、アラブ人にとっての石油である。それを商品として利用しない手はない」と述べる。黒人コーチ協会会长のルディー・ワシントンは臆面もなくこれに同調して、「もっと多くのアフリカ系アメリカ人がスポーツに関わるべきだ。……なぜなら、スポーツは数十億ドル産業であり、アフリカ系アメリカ人はその産業とイメージの重要な部分を占めているからだ」と宣言する²⁰⁾。政治家ジェシー・ジャクソンは、「スポーツはわれわれコミュニティの絶望を希望に変え、低い評価を自信に換え、地縁や人

種の境界を超越する本物のコミュニティ意識を取り戻すことができる」と主張し、スポーツがもたらす富を基盤として、アフリカ系の人々が連帯意識を強化することを切望する²¹⁾。

このような一辺倒で盲目的とさえいってもよいアスレティシズム礼賛はそれだけでも批判的検討に付されるべきであるが、より切実な問題として、過剰なまでのアスレティシズムがアフリカ系青少年の他領域での活動参加を妨げ、抑圧するために、学業不振を招いているとの声も上がっている。ここにスポーツフィギュレーションの第二の位相がある。アンチ・アカデミズムとでもいべき、学業嫌悪や軽視の風潮は、かねてから研究者によって観察されてきた。R・パトリック・ソロモンは、アフリカ系のクラスマームでは、勉強でがんばる生徒が「頭でっかち（“brainiacs”）」というレッテルを貼られ、乱暴な級友に「疎外され、仲間はずれにされ、暴力さえふるわれ」るので、生徒は学校の規律を積極的に破るようにになると報告している²²⁾。H・G・ビッシンガーもまた、優等生が「日陰のもやし」、「裏切り者」、「お前、なんで白人ばかりのクラスにいるんだ」、「なんで白人の教科書を使ってんだ」など、様々な嘲笑や愚弄の標的にされると述べている²³⁾。これら二者の調査はアスレティシズムと学業不振の因果関係を明示しているわけではない。しかしシグニシア・フォーダムとジョン・オグプは、ワシントンDCにある高校をフィールドとして、両者の因果関係を直截的とはいえないまでも、具体的に示唆している²⁴⁾。

アスレティシズムの横溢と学業不振に関連があり、総じてこれをスポーツフィギュレーションと呼ぶならば、この現象の中にあってアフリカ系の若者の将来の選択が著しく偏向し、あるいは制約されているという主張にも領ける。調査によると、20歳から39歳までのアフリカ系男性でプロフットボール選手になれる確率は47,600分の1に過ぎず、また弁護士や医師として生計を立てるアフリカ系アメリカ人が約6万人いるのに比べ、プロアスリートは約3千人に過ぎないともいわれる²⁵⁾。にもかかわらず、あまりにも多くのアフリカ系青少年がアスリートに憧れ、ロールモデルとして選

択している。

スポーツフィギュレーションを構成する二つの位相間の因果関係については議論の余地が残されているとはいえる、この現象がアフリカ系アメリカ人の生活において深刻な問題となっていることは論を俟たない。スポーツフィギュレーションをアフリカ系アメリカ人による一つの実践とするなら、知覚や心理の面でこの実践へと彼ら・彼女らを促し、駆り立てるものが、アスリート表象である。次節ではこの問題に論を移したい。

2. 現代アメリカにおけるアフリカ系アスリート表象

ホバーマンは現代社会に支配的なアフリカ系男性表象を「黒人ペルソナ」と呼び、アスリート、ギャングストラッパー、犯罪者が一体となったものであると主張する。その背景には、アフリカ系アスレティシズムだけでは市場への魅力を支えきれないという産業界の懸念と判断があったという。スポーツ、芸能、広告部門の巨大企業は、アスリートの肉体的かつ心理的特性を劇的に表現し、飾り立てた上で、ヒップホップアーティストというアフリカ系アメリカ人の主要な文化的アイコンや、犯罪者としての負の表象と結び合わせたとする。報道・宣伝戦略によって合成された表象は、今日私たちの生活に絶え間なく、つきまとうように存在しているという²⁶⁾。

黒人ペルソナは、多様で複雑な個性や人間集団内／間の関係を単純化して、アフリカ系の人々の多元的なキャリア選択や生活様式を捨象する役割を果してきた。それは、アフリカ系の若者にとってのモデルや標準となり、彼ら・彼女らの将来設計や職業選択を大きく左右する。アスリートをめざす若者は、黒人ペルソナの存在によって、一方においてラッパーのようなヒップホップアーティストに憧れ、他方において犯罪や犯罪者と深く結びついたストリートカルチャーにも傾倒する。反対に彼ら・彼女らの学習意欲を削ぎ、学力や知的鍛錬を要求する職業を縁遠いものとする。ここ

「黒人」ステレオタイプと対抗戦略 川島浩平

では、ホバーマンの議論に沿ってアスリートとラッパーが、またアスリートと犯罪・犯罪者が複合される事例や過程を順に見ることで、三者の融合物としての黒人ペルソナの性質を明らかにしたい。

アスリートとラッパーの複合については、まずロールモデルとして、ラッパーとして活躍する有名アスリートの存在に言及する。その一例がシャキール・オニールである。オニールは1972年生まれで、92年にドラフト一巡目にオーランド・マジックに1位指名され、以後ロサンゼルス・レイカーズで活躍し、最近引退説を覆してマイアミ・ヒートへの電撃移籍を果たして注目を浴びた。そのパワープレイには定評があり、オリンピック金メダル（1996）、シーズンMVP（2000）、オールスターMVP（2000, 2004）などを含む数々の栄誉や実績を誇る。オニールは広く知られたラップシンガーでもあり、93年に「シャック・ディーゼル」でマイクデビューを果たしてから、97年までに「ベスト・オブ・シャキール・オニール」などを含む6本のCDアルバムを発表した²⁷⁾。バスケットボール選手としての実力は一流だが、ラップに専念するという噂も流れている。NFLには、1993年から2000年までサンディエゴ・チャージャーズやジャクソンビル・ジャガーズでランニングバックとしてプレイしたネイトロン・ミーンズがいる。1994年にはプロボール（ベースボールのオールスターに匹敵する、NFCとAFCの対抗戦）やスーパーボールに出場した名選手である。彼はバギージーンズ、野球帽、ダイアモンドのイアリングを身につけて「ヒップホップは俺のもの」と自慢する²⁸⁾。

以上の例とは逆に、有名ヒップホップアーティストがアスレティシズムを誇る場合もある。その一人 LL クール J（本名ジェームズ・トッド・スマス、1968年生まれ、芸名は“Ladies Love Cool James”というフレーズから）は、音楽と映画二つの世界を又にかけるアメリカエンターテイメント界のスーパースターである。彼は1995年から99年にかけてNBCで放映されたシチュエーションコメディ『In The House』に出演し、菜食主義者で元アメフト花形選手という役柄を見事こなして、大好評を博した。1991

年には映画雑誌上でマイク・タイソンと対談し、「俺はタイソンみたいだ」と誇らしげに語った²⁹⁾。ラン- DMC の元メンバーであるジョセフ・シモンズの会話にも、スポーツの比喩がちりばめられている。このグループは1980年代前半に、ニューヨーク市クイーンズ地区出身の三名ジャム・マスター・ジェイ（2002年射殺）、ラン（ジョセフ・シモンズ）、DMC（ダリル・マクダニエルズ）が結成し、「キング・オブ・ロック」や「レイジング・ヘル」などの大ヒットを次々と世に送り、ヒップホップ界の先駆者として活躍した。ラップ・ミュージックを世界に伝染させた立役者ともいわれる。シモンズは、ラッパーもアスリート同様「ストリートのスタイル、態度、そしてアイデンティティ」を表現すると述べている³⁰⁾。

アスリートとラッパーの結びつきの深さを讃えて、黒人フェミニストのトリーシャ・ローズは、ラップ音楽とは「基本的にビートのあるロックルームである」と述べている³¹⁾。ラッパーがコンサートを開くのに、スポーツアリーナを好むのも偶然ではない。

有名アスリートが犯罪性を醸し出したり、実際に犯罪に手を染めたりする事例は枚挙に遑がない。ホバーマンは特にNBA選手に批判的で、1990年代に活躍したプレイヤーへの厳しい描写が目を引く。『ニューヨータイムズ』は1990年代中葉に、「新野蛮人（ニューバーバーリアン）」がNBAの試合をぶち壊していると報じた。彼らは経営者を動揺させ、コーチに吐き気を催させ、先輩プレイヤーやチームメートをうんざりさせ、ファンに愛想を尽かさせている。「彼らは癪癥を起こしては椅子を投げつけ、練習に不平を並べ立てる³²⁾。」新野蛮人の顔ぶれを挙げると、デリック・コールマン、アイゼア・ライダー、スコッティ・ピッペン、クリスチャン・レイトナー、デニス・ロッドマン、クリス・ウェッパーらである。『USA トゥデイ』も同じ頃NBA選手を槍玉に挙げ、プレイオフは、かつては芸術的な技芸を応酬する場であったが、今では醜悪な言動のはびこる戦場になり、選手はチームの勝利よりも個人の名声を得るためにプレイするようになってしまったと嗟嘆する。新野蛮人の代表がロッドマンである。

彼は「情緒的に病む時限爆弾で、不安定、予測不能、制御不能である。かつては自分を痛めつけるだけだったが、今では回りの人間すべてにとっての危険人物となった³³⁾。」

ホバーマンは『スポーツイラストレイティッド』の誌面広告を取り上げ、興味深い表象解釈を披露する。その広告は、両面フルカラーでピットパーク・スティーラーズのラインバック、グレッグ・ロイドの大きな、むつりした顔を掲載している。「毛穴が全部みえ、光っている。写真という安全な枠の中でだが、個人的に対決するという効果を与えていた。これはゲットーを支配する「男は感情を顔に出さない」という従のよい実例である³⁴⁾。」

1990年代には元スタープレイヤーや現役のヘビー級王者が殺人や婦女暴行の容疑で起訴されるという事件が相次ぎ、一般市民にアスリートというと犯罪を連想させる一因となった。往年は華やかで俊敏なランプレイで鳴らしたO.J.シンプソンは、元妻とそのボーイフレンド殺害の容疑で逮捕された。刑事訴訟では無罪評決が下ったが、民事訴訟で莫大な賠償金を科され、その後メディアのスポットライトとは無縁の生活を送っている³⁵⁾。ヘビー級王者であったマイク・タイソンは、ロードアイランド州のミスマーリカ代表を「デートレイプ」したとして有罪判決を受け、服役した。刑期終了後の1997年6月、王座への再挑戦をかけたタイトルマッチでは、チャンピオンのイヴェンダー・ホリフィールドの耳をかじり切るという野蛮な行為に走り、世界中の観衆に衝撃を与えた³⁶⁾。

アスリートが犯罪者としてのオーラを発する一方で、犯罪者もアスリートとしての仮面をかぶり、それに執着する。いくつもの州は、黒人囚人の多い刑務所からトレーニングルーム器具を奪うという報復的アンチ犯罪法を制定した³⁷⁾。その理由は、囚人が筋力をつけると、釈放されたときにもっと危険だからというものである。この決定の背景には、服役中の黒人は筋肉トレーニングによってますます強く、危険になるという州民の思い込みがある。しかしヤング・ガンズのトム・ゲストは、「俺達の多くはム

ショを出たり入ったりだ。ムショで身体を鍛えちまうと、そのままでいたくなる。趣味のようなもんだ。」と発言し、その思い込みが単なる幻想ではないことを示唆している³⁸⁾。

超人アスリートとしての犯罪者のイメージを決定付けたのは、1992年のロサンゼルス暴動が発生するきっかけとなる訴訟の原告であったロドニー・キングである。『ニューヨークタイムズ』は、ロス市警官による彼への殴打事件を、運動が苦手の白人警官チーム対神話的ジョン・ヘンリー³⁹⁾の子孫である黒い巨人という取り合わせの、変則的運動競技として理解すべきであると報道した。起訴された警官一人の弁護人は、公判前にこう語ったという。「キングが警官の隣に立つ様子は見ものだろう。ピグミーの隣に立つ巨人のようだろうから。」この発言には、スーパーアスリートとしての犯罪者が表象されている⁴⁰⁾。

こうした数々の事例をあげることで⁴¹⁾、ホバーマンは現代アメリカ社会におけるアフリカ系の表象において、アスレティシズム、ヒップホップ、犯罪性の三者が主要な構成要素であり、それらが一体となって黒人ペルソナを形成していると論じるのである⁴²⁾。

3. ホバーマンの対抗戦略

現代アメリカ社会におけるスポーツフィギュレーションという現象と、アメリカの国境を越えおそらくは地球規模で浸透する黒人ペルソナ表象という問題の概要を明らかにした上で、ホバーマンの議論はそれへの対策へと移行する。

まずホバーマンは、上で述べたスチュワート・ホールの提唱する3つのステレオタイプ対抗戦略のうちの第一、すなわちステレオタイプの逆転がアメリカ社会で広く実践されていることに留意し、それを「飼い慣らし」戦略と呼んでいる。その具体例には、均整のとれた身だしなみのよい黒人男性モデルに、ラルフ・ローレンのポロスポーツネクタイを着せる全面広

告⁴³⁾や、白人幼児と黒人アスリートのツーショットを掲載するスポーツ誌の表紙⁴⁴⁾、あるいは黒い巨体を肥満や大食漢として描写する特集記事⁴⁵⁾などが含まれる。

しかしながらホバーマンは、これらの「感じよい」イメージ戦略を、「社会的に効果的な方法で、人種的態度を変えられそうにない」⁴⁶⁾として退け、その上で独自の戦略を企てる。それは歴史学的であり、かつ実証的である。この戦略を、本稿はホールの三戦略と並置し得る、一つの戦略として検討したい。この戦略上の主要な論点は2つある。第一に、フィグゼーションや黒人ペルソナが歴史的に形成された現象や表象であり、黒人に本来備わった才能や資質の単なる表現ではないことを示すために、それらが存在しなかった過去を照射し、オルターナティブが成立した可能性を主張することである。第二は、その上でフィグゼーション／ペルソナ表象を生起させた歴史的要因や文脈を特定することである。

では、現代のアフリカ系アメリカ人が直面する二重の困難（フィグゼーション／ペルソナ表象）は、どのように形成されたのだろうか？　ホバーマンはそれが、過去一世紀あまりの期間、アフリカ系アメリカ人があらゆる知識人サークルから締め出されてきたことの直接的な帰結であると論じる。白人中心主義が社会の知的な職業や地位を独占し、そこから黒人を排除してきたことが原因で、黒人は結果的にアスレティシズムに肩入れするようになったと主張するのである⁴⁷⁾。ここでの因果関係は残念ながら、本書で検証されているとは言い難く、せいぜい「鶏か卵か」の循環論を示唆するにとどまっている。しかしこの点での因果関係は本書の主要な主張の一つとして留意しておく必要がある。

知識人サークルからの締め出しがスポーツへの傾倒を促す過程の観察者として、ホバーマンは歴史的証人を登場させる。第二次世界大戦中にアメリカにおける人種関係に調査のメスをいれたガンナー・ミュルダールである。ホバーマンは、ミュルダールが発見した「黒人の劣等意識」が前提として存在し、そのような意識を払拭する戦略として有効であったため、ア

スレティシズムが重視されるようになったと主張するのである⁴⁸⁾。そしてその後、公民権運動の高揚と大学・プロスポーツにおける人種統合の達成を経て、本格的なフィゲゼーションと黒人ペルソナの時代が到来したとする。

それでは奴隸制の廃止からミュルダールの観察までの期間、アフリカ系アメリカ人にはいかなる選択の余地が残されていたのだろうか？ アスレティシズムを自己の天分として受け入れ、誇示し、アカデミズムを軽視または敵視する以外の道は開かれていたのだろうか？

さしあたってホバーマンの議論から離れ、19世紀末から20世紀初頭に名を成した黒人アスリートのほとんどがインテリであったという事実に着意したい。具体名を挙げるなら、ハーバード大学在学中の1895年に400メートルを51.5秒で走り、当時の世界記録にあと一歩と迫ったナポレオン・B・マーシャル、ウィスコンシン大学在学中の1904年にセントルイス五輪代表として400メートルハードルで銅メダルを勝ち取ったジョージ・ボーグ、ペンシルヴァニア大学在学中の1906年にロンドン五輪代表として4×400メートルメドレーリレーで金メダルに輝いたジョン・ティラーなどを直ちに想起できる⁴⁹⁾。彼らは今日のようなスポーツ奨学生ではなく、学力で入学を果たし、卒業後は法曹界などの要職に就いた人々だった。アーサー・アッシュが収集した当時の写真には、マーシャルやボーグが、「H」や「W」など大学名イニシャルのロゴが入ったユニフォームを身にまとい、白い肌のチームメートに囲まれて誇らしげにポーズを取る姿が写し出されている⁵⁰⁾。確かに、現代の「新野蛮人」が個人主義に走る空間とはまったく別種の世界がそこにあるようにみえる。ホバーマンも、『シカゴ・ディフェンダー』に掲載された、当時「世界最速スプリンター」と謳われたハワード・P・ドリューの大きな挿絵を紹介する。そこにある、走るだけでなく勉強もしている姿こそ、黒人にとっての模範だったというのである⁵¹⁾。

対照的に一般人の多くは、奴隸制廃止後まもないこの時代に、貧困に喘

ぎ、文化的に孤立して、イギリスマチュアリズムとして成立した近代スポーツとはまったく縁のない生活を送っていたと、ホバーマンは指摘する。彼ら・彼女らは、栄養失調で生命が危険に晒される環境に置かれ、腹減らしのスポーツなどにわざわざ身を入れるような余裕など持ち併せていなかったという⁵²⁾。同胞のお粗末な健康状態を嘆いた W・E・B デュボイスは、1897年にこう書き残している。

ここで再び言おう。南部の初頭、中等教育では将来、大いに運動競技をしなければならない。頭はいいが運動ができないやつは、運動はできるが頭の悪いやつと同じように、軽蔑されるようにならなければいけない。若い女性で、長い距離を歩けないものは、求婚されなくなるようでなければいけない⁵³⁾。

ここにある婉曲表現は、「勉強も大切だが、運動をもっとやらなければならない」という提言として解釈できる。そこにスポーツフィグゼーションの下、「勉強をもっとやれ」と力説し続けている社会学者ハリー・エドワーズらアフリカ系知識人とは逆の志向を読み取ることが可能である。ホバーマンは、女性に向けた言葉を「体力をつけて健康であれ」という提言として読み、それと併せて総合的にこう判断する。デュボイスの生きた時代に、アフリカ系アメリカ人はアスレティシズムとは疎遠な位置にあり、それゆえデュボイスはアスレティシズムを自分のものにして、強く健康な肉体をつくる必要を痛感していた。

次にホバーマンは、アスリートとしての強さを盲目的に賞賛するのではなく、強い肉体の魅力に屈することもなく、アスレティシズムへの傾倒がもたらすネガティブな側面を見透かす見識が存在したとし、そのような立場からの言説を紹介する。その一つに伝説的黒人ボクサーであるピーター・ジャクソンにまつわるものがある。彼はヴァージン諸島に生まれ、オーストラリアやイギリスでヘビー級タイトルを獲得した。その後、アメリカの

タイトルにも挑戦したが、分離主義の壁を克服することができず引退を余儀なくされた。そのジャクソンを知る黒人ボクサーのアレン・ジョンソンによる証言を引用する。曰く、「ピーター・ジャクソンとは言葉を交わしたことがある。やつは、試合を汚すようなことは絶対しなかった。白人ファイターよりやつが強いからといってばか騒ぎする黒人がいると知ったら、やつはそいつらを相手にしなかっただろう⁵⁴⁾。」間接的とはいえ、ホバーマンはここに、後年「俺は美しい」、「俺は強い」と高らかに宣言し、白人観客の敵愾心を煽ったモハメド・アリとは対照的ともいえる、謙虚で理性的な態度を見ようとする。アメリカで黒人ボクサーとして初めてヘビー級チャンピオンになったジャック・ジョンソンを批判する人々にも言及し、ホバーマンはスポーツの王者が英雄ではなかった時代に注意を向けようとする。曰く、「ジョンソンは疑惑と憎悪の対象だった。中産階級や上昇志向の黒人たちは、品に欠け、落ち着きがなく、教養のない同胞を人種全体に害を与えるとして批判した⁵⁵⁾。」

ホバーマンは、19世紀後半のアフリカ黄金海岸における人種観や人種関係も論拠として引き合いに出す。レイ・ジェンキンスによる歴史研究によると、その海岸地域にはファンテなどの民族集団が居住していた。彼ら・彼女らは、長年の大西洋貿易を通じてイギリス、カリブ海地域、アフリカが交流した結果もたらされた「ヨーロッパ系アフリカ人 (Euro-Africans)」と称すべき、混血の人々であった。ファンテの人々は、内陸に領土があり自分たちより肌の色の黒いアサンテなどの民族集団を「黒い農民-戦士で、男性的、勇猛」と、自分たちを「女性的で、軟弱で、知的志向」と見なしていた。またファンテの指導者たちは若い世代に体力よりも知力による成功を期待した。ホバーマンは、このようなファンテとアサンテとの関係やファンテの自他表象は、現代アメリカにおける「白人」と「黒人」との関係や白人の自他表象に比較しうるものであると示唆する。そして、「イギリス人との不平等な競争においてヨーロッパ系アフリカ人を救済するには、生き残りのための武器を、競技場ではなく教室で見つけ

なければならなかった」というジェンキンスの結論に注目する⁵⁶⁾。ここに、生き残りをかけてスポーツ技芸の習得に励む現代のアフリカ系アメリカ人とは逆の志向をもつ黒人表象を得ようとするのである。もちろん、アメリカ合衆国と黄金海岸との文化的、地理的隔たりは否定すべくもなく、同時代に両者の間に接点や交流があったかは不間に付されている。それでも、異なる時空に、現代とはかけ離れた黒人表象・認識が成立した可能性を、ジェンキンスが示唆していることもまた事実である。

20世紀に入って、一度目の世界大戦が勃発し、その後繁栄の20年代が到来したが、この時代にもアフリカ系アメリカ人にとってのオルターナティブは開かれていた。ホバーマンは一例として教育現場での論争を取り上げる。1917年、エドウィン・B・ヘンダーソンらは、「黒人カレッジにおけるディベートと運動競技」と題する論文を発表した。その中で彼らは、「ディベートが急速に、黒人学校における生徒の活動で主要な位置を占めつつある」現状を高く評価し、ディベート精神の発達が黒人の知的成果の集積に結びつくことを期待したという⁵⁷⁾。ホバーマンはそのような期待が、作家アレン・ロックの「知的夜明け」宣言にも反映されていたと主張する。ロック曰く、いまや黒人の知性は、「依存という逆境によって押し付けられてきた身を守るために社会的模倣」から脱皮しつつあり、黒人は「模倣と暗黙に了解された劣等性がもたらす心理状態を振り払い」、「神経過敏状態から徐々に立ち直りつつ」あり、知的活動面では、「新しい、鋭敏な好奇心がこれまでの無気力に取って代わりつつある」と⁵⁸⁾。

以上みてきたように、歴史を一世紀遡るか、あるいは大西洋を渡って時空を移動することで、ホバーマンは現代とは異なるアフリカ人・アフリカ系の人々とアスレティシズムとの関係を析出しようとする。それぞれの事例への言及は断片的でもあり、その背後に彼の意図とは異なる意識や意味が隠されていた可能性を否定することはできない。とはいえ、彼の議論は総じて、読者にフィギュゼーションや黒人ペルソナの安定性や連続性を批判的に検討するための十分な手がかりや材料を提供しているといえる。しか

しそれらのオルターナティブにもかかわらず、アフリカ系の人々は、アスレティシズムとの関与を深め、それを自己のアイデンティティの中核に位置づける途を選択し、今日に至った。彼ら・彼女らにそうさせた歴史的条件とは何なのか？ それに答えるのがホバーマンの第二の論点である。

その理論的基盤となるのが、アフリカ系アメリカ人文学学者ラルフ・エリソンの理論である。ホバーマンが本書をこのアメリカ文学史上の巨匠に捧げていることから、両者の間には深いつながりがあることが推察できる。ここではエリソン理論の要点を、ホバーマンの解釈に沿って二点に絞って紹介するだけに止めるが、詳しくはエリソンの「リチャード・ライトのブルース」を参照されたい⁵⁹⁾。

まず第一の理論は、「抑圧された黒人男性の身体は、頭脳に達するはずだったエネルギーを吸収することによって、彼の知的可能性を抑制するというものである。」そして第二理論は、「前個人主義的黒人コミュニティは、自衛のために個性を抑圧する。一人の行為のせいで集団全体が罰されるという経験から学んできた黒人コミュニティは、効率的な行動制御技術を練り上げた」というものである⁶⁰⁾。ホバーマンは二つの理論に基づいて、二つの仮説を提起する。第一に、長年の奴隸制による拘束によって、独特で特殊な身体的存在に仕立て上げられた黒人は、本来なら頭脳に到達するはずだったエネルギーを肉体が吸収してしまうため、十分な知的発達を遂げることができなかつたと。ここにおいて、奴隸制が黒人の知的劣等の環境的要因として特定されるのである。そして第二に、かく運命付けられた黒人たちは、教育を受けて知的に向上しようとする同胞を制御し、統制する技術を作り上げ、緊密な私的・公的ネットワークのなかで、それを行使したと。それゆえ、勉学意欲に富み、進取の気性がある黒人も、奴隸制の遺産という闇のなかに沈黙し、沈滞せざるをえなかつたのである。

エリソンに依拠してホバーマンは、解放直後のアフリカ系の人々の状況をこう解釈する。彼ら・彼女らは過酷なハンディを背負っていた。それでも解放によって自由な空気が広がるなかで、黒人たちの野心や願望は学業

や専門職へも向かった。だがハンディによる制約は厳しく、かつ網羅的であったため、白人に独占されていた分野に参入し、そこで成功することを望むべくもなかった。したがって彼ら・彼女らは、南北戦争後の教育に多くの期待を向け、ハンディを克服できるような内実ある教育の実践を待望した。そのためにデュボイスは少数精銳のエリート教育を主張し、みずから実践したが、黒人社会は「巷で喧伝されるニグロ人種の劣等を受け入れる」ブッカー・T・ワシントンの産業教育を選択した⁶¹⁾。ワシントン主義とデュボイス主義が対立する中で、アメリカ黒人は前者を支持したわけだが、ホバーマンはこの決定が彼ら・彼女らの前途を限られたものとする運命の選択であったと主張する。

ホバーマンは、デュボイスによる少年時代の回想にも言及する。デュボイス曰く、「私が〔白人の〕クラスメートを試験で負かした時、あるいは競走で負かした時、あるいはやつらの筋張った顔を殴った時、空は真っ青だった」⁶²⁾。しかし、今日の黒人少年たちはデュボイスの経験を共有することはめったにないとホバーマンは論じ、こう続ける。彼らは競走で白人を負かすことはお手のものだが、試験でそうすることとはほとんど無縁である。今日では試験で負ける方が「クール」だからである。ワシントン主義の選択は、黒人を第二級市民の地位に甘んじさせ、教育現場で知的向上心のある指導者や教育者を意気阻喪させてしまった。

そんな状況下にあって、黒人たちが肉体的活動・技能を高尚で尊敬すべき資産とみなす証言を数多く残すようになることにホバーマンは注目し、以下のような事例を挙げる。1924年、ハーヴード大学新聞は、「運動競技は普遍言語である」と宣言した。それは運動競技が、「アメリカにおける人種関係を改善し、友好的精神を涵養し、偏見を駆除し、学び、教えられ、人類愛を育てる」からである⁶³⁾。1934年、ハンプトン・インスティテュートは、コルゲート大学から講師として白人コーチを招聘し、黒人学生対象のコーチ学講座を開設した。その白人コーチは黒人たちが「すでに教授法に関する知識と経験を積んでいることに驚嘆し」、また彼らが「コーチ

がフットボールの点では未熟とはいえないことを発見」した。白人コーチは、知的停滞という悪評判の反証となるような知的な発達に至る道として、スポーツを見直したという⁶⁴⁾。

同じ頃、全国的、さらには世界的に注目を浴びるアフリカ系アスリーントが次々と誕生した事実にホバーマンは注意を促し、次の事例を指摘する。ジェシー・オーエンスは1936年ベルリン五輪で、100メートル、200メートル、走り幅跳び、400メートルリレー4種目で金メダルの栄冠を手中にした。1938年、ジョー・ルイスはマックス・シュメリングとのリターンマッチに勝利して、ジャック・ジョンソン以来白人に占められ続けていたボクシングヘビー級王座に輝いた。長い間同胞の英雄を求めてきた黒人大衆も、教育の行き詰まりに落胆してきた知的指導者も、ルイスの見事な勝利に歓喜の声をあげた。人種主義に虐げられてきた人々は、アスレティシズムの誘惑に打ち勝つ術もなかった⁶⁵⁾。

その後の展開は、既に見たとおりである。アフリカ系アメリカ人とアスレティシズムの絆が固まりつつあった1930年代はやがて幕を閉じ、ミュルダールが人種関係を調査した40年代へとアメリカは歩を進めた。時代の焦点は、ジャッキー・ロビンソンのデビューに象徴されるメジャープロフェッショナルスポーツでの人種統合や、公民権運動の高揚へと移行した。そのむこうに、現在へと続くスポーツフィグゼーションの時代があり、そこでは黒人ペルソナ表象がアフリカ系アメリカ人の代表的、支配的イメージとして跋扈することになるのである。

おわりに

稿を閉じるにあたって、いくつかの角度から『ダーウィンのアスリート』の評価と位置づけを試みるものとしたい。

第一に本書は、黒人ペルソナ表象の対抗戦略として、いかなる意義を有するであろうか？ 黒人ペルソナとは、アスリート・ラッパー・犯罪者の

複合イメージであり、社会的にポジティブな要素のみならず、貧困、暴力、違法といったネガティブな要素と結びついているため、アスリートとして名を上げようとする青少年を、非行や犯罪へと駆り立てているというのが、主たる特徴であった。ホバーマンの歴史的考察は、豊富な事例によって黒人ペルソナとは明瞭に異なる表象や関係性を提示しており、その点で評価できるものと判断する。第三節で列挙した事例の一つ一つがそれを裏付けている。エリートアスリートの時代の黒人スポーツマンは、学業や専門職キャリアにおける成功者であり、黒人ペルソナの不気味なイメージとは無縁の人物だった。デュボイスが嘆いた黒人庶民は、健康状態が悪く、運動競技に参加するだけの暇も余裕もない人々だった。また富と名声に驕る現代のアスリートとは対照的なボクサーがリングに立ち、アスレティシズム批判をためらわない知識人サークルも存在した。これら数々の事例は、スポーツフィギュレーションや黒人ペルソナが現代という時代の産物であることを明らかにし、それゆえ将来において黒人アスレティシズムの位相や形態が変容する可能性をも示唆する。その意味において、表象対抗戦略としてのホバーマンの立論は評価に値するものである。

第二に、本書は黒人運動能力論争においていかなる位置を占めるであろうか？別の機会に私は本論争を、アフリカ系アメリカ人の傑出した運動能力を生得的・先天的なものとみなし、その根拠を遺伝的・生物学的な要因に求める「遺伝派」と、それを経験的・後天的なものとみなし、その根拠を環境的・社会／文化的な要因に求める「環境派」との論争であると定義した⁶⁶⁾。ホバーマンは遺伝的要因の影響を疑い、遺伝的要因の役割を積極的に見直そうとしたジャーナリストのジョン・エンタインに辛らつな批判を浴びせており、環境派としての立場を打ち出しているかに見受けられる⁶⁷⁾。したがって検討すべきは、ホバーマンの議論が遺伝派にといでいかなる反論となり、環境派にといでいかなる貢献をなすかということになる。環境派の主たる論点は、黒人の優れたアスレティシズムを生得的要因から切り離し、それが環境的に形成されるというものである。ホバーマ

ンの証拠は、このような主張を支持するであろうか。

ホバーマンの援用するラルフ・エリソンの理論は、奴隸制度という社会的、政治経済的構築物によって黒人が固有の身体性を獲得したと想定する点で、環境派の装いをとる。しかし奴隸制以後の時代に関するホバーマンの議論に、黒人が優れた運動能力を獲得する環境や過程を証明するものはほとんどみられない。エリートアスリートの群像は、彼らの知力と同時にその運動能力をも証明する。一般人のお粗末な健康状態は、彼ら・彼女らの運動意欲の欠如を示唆したとしても、運動能力の欠如を証明するものではない。ピーター・ジャクソンの謙虚さや理性的な態度や、ジャック・ジョンソンへの批判もまた、両者のアスレティシズムの由来とは無縁である。1910年代から20年代にかけての大学ディベートブームは注目すべき現象だが、同じ記事の中でヘンダーソンは黒人大学でのスポーツ人気にも目を見張っている。アレン・ロックの宣言は多くの同胞を鼓舞したとはいえ、孤独な知識人のプロパガンダとそれなくもない。本書の他章には、エンタインのような遺伝派に与する論客への対抗的な発言がみられるとはいえ、ホバーマン自身が提供する証拠の内実は、そのような発言を十分に支えるものとはいえないのが実情である。『ダーウィンのアスリート』の黒人運動能力論争における位置づけは、本書全体の議論を踏まえて総合的になされるべきであるが、そうしたとしても、本書の反「遺伝派」としての意欲が明確になることはあっても、「環境派」としての論拠は不鮮明なままであるにちがいない。

しかしながら、アフリカ系アメリカ人とアスレティシズムの強い関連を今日的、現代的現象として捉え、そのあり方を自明視せず、その歴史的起源をたどり直そうとする姿勢に、私たちは改めて注目すべきではないだろうか。ホバーマンの著作は、わが国の黒人研究に一つの方向性を指示しているように思えてならない。

日本人が黒人アスレティシズムを天賦の才とみなし、アフリカ系アメリカ人アスリートの身体能力を生得的、生物的特質とみなす風潮が強いこと

は、別の機会に論じたとおりである⁶⁸⁾。だからこそ、ホバーマンに習って、日本人のアフリカ系アスリート観とその表象を再検討するべきであるとはいえないだろうか。幕末の志士や明治の元勲がアフリカ系アメリカ人と遭遇して以来、私たちの黒人アスリートに対する畏敬と羨望がいかに形成され、変容してきたのか？ それは私たちの人種偏見といかに関わってきたのか？ 現在私たちは黒人アスレティシズムをいかに理解し、表象し、教育し、次世代へ伝達しようとしているのか？ こうした問いの一つ一つに、取り組むべきではないだろうか。

『ダーウィンのアスリート』は、そうした作業のための有力なモデルを提供する。日本をフィールドとして、日本人のアフリカ系アメリカ人アスリート観の形成と変容を問い合わせ、その過去と現在を射程に捉える研究が、今求められているのである。

注

- 1) 「黒人」というカテゴリーに科学的根拠が存在しないことは周知の通りだが、アメリカ社会で“blacks”という表現が日常的に用いられている点に鑑み、同カテゴリーは社会的、文化的概念として有効であるという立場を本稿は支持する。その訳語として「黒人」を採用するが、以下では括弧をはずして表記する。また「アフリカ系アメリカ人」と同義で用いるものとする。
- 2) John Hoberman, *Darwin's Athletes: How Sport Has Damaged Black America and Preserved the Myth of Race* (Boston: Houghton Mifflin, 1997). 稿末の評価や解釈以外、本稿はホバーマンの論点を紹介することに力点を置いている。しかし、本文で言及される文献のほとんどは同書の注や参考文献一覧を参照して、私が入手し、読み直した上で引用している。したがって、引用の解釈は多くをホバーマンに拠っているとはいえ、私自身の判断と責任で行っていることに留意されたい。
- 3) Aaron V. Cicourel. アメリカの社会学者。*Method and Measurement in Sociology*など多くの著作がある。
- 4) Pierre Bourdieu, “Program for a Sociology of Sport,” *Sociology of Sport Journal* 5 (1988), 153. 「ゴールデンゲットー」とは、優秀な黒人アスリートが法外な収入を得ているにもかかわらず、社会的に隔離されているかの状況におかれている様子を響えたものである。ブルデュエはこのような黒人アスリートと右翼、左翼の人々との関係に準えて、スポーツ社会学という学問がスポーツライターから嫌われ、社会学者から敬遠されていると主張する。ここでは黒人アスリートの隔離を問題としたいので、後半を省略した。
- 5) Douglas Hartmann, “Rethinking the Relationships between Sport and Race in American Cul-

- ture: Golden Ghettos and Contested Terrain," *Sociology of Sport Journal* 17 (2000), 230.
- 6) 拙稿「アメリカスポーツと人種—日米両国における研究の動向と展望—」『武藏大学人文学会雑誌』第33巻第4号2002.5, 127-129。
- 7) Hartmann, "Rethinking," 237.
- 8) 一例として Russell L. Curtis, Jr., "Racism and Rationales: A Frame Analysis of John Hoberman's *Darwin's Athletes*," *Social Science Quarterly* 79.4 (December 1998), 885-891がある。 *Darwin's Athletes* に対する様々な反響については本書 "Preface to the Mariner Edition" に詳しい。
- 9)マイク・マークシーは著書の中で、「スポーツの分野における黒人の成功は……個人としての黒人と集団としてのブラック・コミュニティの成長過程を歪んだものにしてしまった、ときわめてはっきりした見解を提示している」として、比較的好意的な評価を下している。マイク・マークシー（藤永康政訳）『モハメド・アリとその時代 グローバル・ヒーローの肖像』未来社 2001年, 482を参照。ヘニング・アイヒベルグは、中立的な立場から本書を紹介する。ヘニング・アイヒベルグ（有元健訳）『グローバル、ポピュラー、インター・ポピュラー—市場、国家、市民社会にまたがるオリンピック・スポーツ』清水諭編『オリンピック・スタディーズ 複数の経験・複数の政治』せりか書房 2004年, 44を参照。日本人による言及としては、山本敦久「近代スポーツに内在するもうひとつの近代スポーツスポーツを通じた人種的抵抗を再考する—」『現代スポーツ評論』9 (2003), 140-141などを参照。
- 10) ホバーマンの用いる「フィグゼーション」という言葉には、管見の限りでは定訳がない。しかし『ダーウィンのアスリート』第一章のタイトルに取り入れられるほど、彼の議論において中心的な役割を果たす概念である。ここでは、アフリカ系アメリカ人がアスリートという職業を選びたがる現象としての意味に「固定化」という訳語を、彼ら・彼らのアスレティシズムへの熱中や没頭としての意味に「執着」という訳語を充て、便宜的に「フィグゼーション」＝「固定化／執着」と考えておく。但し、以下では片仮名のフィグゼーションを原則として用いるものとする。
- 11) Stuart Hall, ed. *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices* (London: Sage Publications, 2002), 269-276.
- 12) 拙稿「人種」研究の対象としてのアメリカスポーツ—黒人運動能力論争と日本人（アジア系）ステレオタイプの場合—』『武藏大学人文学会雑誌』第35巻第4号2004.3, 115-116。
- 13) John Hoberman, "Totem and Taboo," *Skeptic* 8.1 (2000), 35-38などを参照。これはジョン・エンタイン著の書評である。注15を参照。
- 14) Hoberman, *Darwin's Athlete*, xxiii. 本書の序章は、この一文で始まる。なお以下では、"Hoberman" と記した場合は *Darwin's Athlete* からの引用とする。
- 15) Jon Entine, *Taboo: Why Black Athletes Dominate Sports and Why We Are Afraid to Talk About It* (New York: Public Affairs, 2000), 翻訳書：ジョン・エンタイン（星野裕一訳）『黒人アスリートはなぜ強いのか？ その身体の秘密と苦悩の歴史に迫る』創元社 2003年, 62。
- 16) 1996 Racial Report Card, Center for the Study of Sport in Society
[<http://www.sportinsociety.org/rgrc.html>] (2005.02.10).

「黒人」ステレオタイプと対抗戦略 川島浩平

- 17) 周知の通り、2001年にシアトル・マリナーズの鈴木一朗がこの連鎖を打ち破った。
- 18) Robert Staples, "Black Male Genocide: A Final Solution to the Race Problem in America," *Black Scholar* (May-June 1987), 7 (Hoberman, 9).
- 19) Philip Hersh, "Extraordinary Genius' Commands Our Love," *Chicago Tribune*, March 24, 1995 (Hoberman, 9) で引用。
- 20) ファレルとワシントンの発言は、Betsy Peoples, "Finishing the Course," *Emerge* (June 1995) (Hoberman, 9) で引用。
- 21) Ira Berkow, "Jesse Jackson Looking for the Light in a Sports World," *New York Times*, April 14, 1993 (Hoberman, 9-10) で引用。
- 22) R. Patrick Solomon, *Black Resistance in High School: Forging a Separatist Culture* (Albany: State University of New York Press, 1992), 4 (Hoberman, 249 n3) で引用。
- 23) H.G. Bissinger, "When Whites Flee," *New York Times Magazine*, May 29, 1994 (Hoberman, 249 n3) で引用。
- 24) Signithia Fordham, and John U. Ogbu, "Black Students' School Success: Coping with the 'Burden of Acting White,'" *Urban Review* 18 (1986) (Hoberman, 249 n3).
- 25) Hartmann, "Rethinking," 236.
- 26) Hoberman, xxviii.
- 27) Hoberman, xxviii. また以下 NBA 選手に関する情報は、[Dunkshot ダンクショット] 2005年2月号付録「2004-05 Season NBA Players' Data Book 2004-5シーズン選手名鑑&個人記録集」も参考にした。
- 28) "So Little Known to Be So Good," *New York Times*, October 23, 1994 (Hoberman, xxviii).
- 29) [CUT] No.8 1991年3月号特集。発言は Carl Husemoller Nightingale, *On the Edge* (New York: Basic Books, 1993), 182 (Hoberman, xxviii) で引用。
- 30) Amy Linden, "The Grand Old Men of Rap Strike Back," *New York Times*, June 23, 1993 (Hoberman, xxviii). [Rockin'on] 2005年1月号増刊号「Buzz ロック誕生から50年、その足跡を辿れ！ 永久保存版 50th Anniversary of Rock】, 122。
- 31) Michele Wallace, "When Black Feminism Faces the Music, and the Music Is Rap," *New York Times*, July 29, 1990 (Hoberman, xxviii).
- 32) Ira Berkow, "Sports of The Times: The 'New Barbarians' Are Really Old Hat," *New York Times*, Jan 31, 1995, B8 (Hoberman, xxix).
- 33) Bryan Burwell, "Rodman not talking trash; he's crying for professional help," *USA TODAY*, May 4, 1994, 10C (Hoberman, xxvii).
- 34) グレッグ・ロイドの顔写真は次に掲載されたリーポック社の広告で用いられている。
Sports Illustrated, January 8, 1996.
- 35) 拙稿「第52章 O・J・シンプソン裁判一性・人種・社会階級で分裂するアメリカ社会」明石紀雄、川島浩平編『現代アメリカ社会を知るための60章』明石書店2001年、220-223。この事件についてホバーマンは詳しく論じていない。これは私の補足である。
- 36) タイソンの事件も私の補足である。
- 37) "Milwaukee Plan Would Ban Jail Weight Lifting," *Chicago Tribune*, March 24, 1994; "Building

- a Better Thug?" *Time*, April 11, 1994, 47 (Hoberman, xxix).
- 38) "Rap, R&B Stars Work to Look as Hot as They Sound," *USA Today*, January 6, 1994 (Hoberman, xxviii).
- 39) 奴隸として生まれ、後年鉄道工夫として働き、岩石を碎くのに蒸気ドリルと勝負し、これを負かしたが疲労のためにハンマーを握ったまま死亡したといわれる、伝説的怪力の持ち主。今日まで民話として語り継がれているが、実在したかは諸説あり定かではない。
[http://www.ibiblio.org/john_henry/] (2005.02.10) 参照。
- 40) "Image-Making Strategy in the Rodney King Case," *New York Times*, December 25, 1992 (Hoberman, xxix).
- 41) 本稿はアスリートを中心に取り上げるので、アスリートとラッパー、アスリートと犯罪者の結びつきを論じ、三者の複合を論じる際のもう一つの辺であるラッパーと犯罪者の関係を敢えて取り上げない。
- 42) 『ダーウィンのアスリート』は、グレッド・ロイドの場合のように、具体的な表象事例を指摘しているとはいえ、実例を掲載していない。こうした言説を並べることで、人々に共有される「黒人ペルソナ」表象の存在を証明したことになるのかについて、読者は不確かなまま取り残される印象を拭い去れないが、この問題は表象論の根幹にかかわるものであり、機を改めて論じるものとする。総じて本書の方法論は、言説の集積とその解釈を主軸としているが、黒人ペルソナという表象の存在に懐疑的な読者を納得させられるかどうかは、慎重な検討が必要である。
- 43) Hoberman, xxx.
- 44) 例えば *Sports Illustrated*, October 2, 1995 の表紙はボストン・レッドソックスのモー・ボーン選手とあどけない白人少年のツーショットを掲載している。
- 45) Steve Rushin, "Big," *Sports Illustrated*, September 4, 1995など。
- 46) Hoberman, xxxiii.
- 47) Hoberman, 6.
- 48) Ibid.
- 49) Arthur R. Ashe, Jr., *A Hard Road to Glory: A History of the African-American Athlete 1619-1918* (New York: Amistad, 1993), 58-67.
- 50) Ibid., 同書の42ページと43ページの間に挿入された数多くの写真の中に、マーシャルやボーグがチームメイトと一緒に会している写真も含まれている。
- 51) *Chicago Defender*, November 15, 1915, 7 (Hoberman, 11).
- 52) Frederick, L. Hoffman, *Race Traits and Tendencies of the American Negro* (New York: American Economic Association, 1896) (Hoberman, 11).
- 53) W.E.B Du Bois, *On Sociology and the Black Community* (Chicago: University of Chicago Press, 1987), 236 (Hoberman, 11).
- 54) "Race Gleanings," *Indianapolis Freeman*, February 8, 1905 (Hoberman, 13).
- 55) Jeffrey T. Sammons, *Beyond the Ring: The Role of Boxing in American Society* (Urbana: University of Illinois Press, 1988), 42 (Hoberman, 14).
- 56) Ray Jenkins, "Salvation for the Fittest? A West African Sportsman in Britain in the Age of

「黒人」ステレオタイプと対抗戦略 川島浩平

- the New Imperialism," *International Journal of the History of Sport* 7 (May 1990), 50 (Hoberman, 14).
- 57) V.D. Johnston and E.B. Henderson, "Debating and Athletics in Colored Colleges," *The Crisis* 14 (July 1917), 129 (Hoberman, 27).
- 58) Alain Locke, "The New Negro," Alain Locke, ed. *The New Negro: An Interpretation* (New York: Albert and Charles Boni, 1925), 3 (Hoberman, 18).
- 59) Ralph Ellison, "Richard Right's Blues," *Shadow & Act* (New York: Random House, 1964), 77-94 (Hoberman, 19-22).
- 60) Hoberman, 19-21.
- 61) Hoberman, 17.
- 62) W.E.B. Du Bois, *Early Modern African American Writers: Volume IX W.E. Burghardt Du Bois: The Souls of Black Folk: Essays and Sketches* (London: Archibald Constable, 1905), 2 (Hoberman, 251 n54).
- 63) Howard University *Hilltop*, April 29, 1924 (Hoberman, 26).
- 64) William I. (Bill) Gibson, "The Old Football Rulers Pass," *The Crisis* (December 1934), 363 (Hoberman, 25).
- 65) エンタイン, 223-257.
- 66) 注12参照。
- 67) 注13参照。
- 68) 注12参照。

(2005年1月12日 受理)